

# 文艺の広場

短歌、俳句、川柳、五行歌：短い詩形でふるさとを、日常を語るとき、その思いはいつそう強くなるのではないだろうか。

## ◆俳句

### 段丘

段丘は伊那のまほらぞ初山河  
七草の小ぶりを詫びて伊那の人  
天龍の波の荒びや寒に入る  
桑の芽や父一代の家業にて  
応召の父に抱かれしさくらどき

### 古畑恒雄

(高3回)

●ふるはた・つねお  
飯田市扇町出身。実家は薪炭業。飯田市の大火（1947年）で罹災。高校卒業と同時に飯田市大平中学校助教諭。1年間飯盒で自炊する生活のち、上京して大学で法律を学び司法試験に合格。検事、公証人を経て現在弁護士。俳句歴は約40年。現在、宮坂静生氏主宰の結社「岳（松本市）の同人（無監査）。個人句集『林檎童子』（2014年・角川書店）ほか。

### 幻戯会

百歳の寿命まつびら瓢の笛  
働く生きるに慣れて衣被  
蝶の翅防潮堤に来て合掌  
雪解水天に昇りて光りけり  
玄室のミニラに持たす種袋

### 林 璧

(高5回)

●はやし・あきら  
高森町出身。俳句勉強会「幻戯会」で月2回、角川庭園で句会を行っています。先生は結社「河」副主宰、編集長の鎌田俊氏です。もう11年目で、年1回句集を発行、掲句は今年の私の句集から抜粋したものです。雪解水の句は平成23年度NHK俳句大賞を下さった、有馬朗人先生を偲んで、先生の名句「光堂より一筋の雪解水」を本歌取りしたものです。

### 酒蔵見学

蔵の奥水音高き師走かな  
奥多摩や次第に深く残る雪  
時の棲む裏木戸の奥夕紅葉  
時雨るるや蔵付き酵母室の中  
販促の蔵人に会う夜の秋

### 北林 巖

(高17回)

●きたばやし・いわお  
高森町出身。勉強会の分科会で、東京都酒造組合の本部が立川にあることから酒蔵見学の担当となつた。別の会で懇意になつた山遊亭金太郎師匠と、落語と俳句と酒蔵見学の会を始めた。1句目「多満自漫」にて、師匠の紹介で来てくれた「百鳥」編集長選。2句目「澤乃井」、大雪で青梅線不通が続いた後。3、4句「嘉泉」。最後は日本橋三越にて「善光寺外苑西之門」。

## ◆川柳

### コロナマスク

お出掛けをまた引き返しマスク持ち  
毛羽立ちが洗いマスクのケチの程  
マスク顔笑い目いいえ眠い目だ  
コロナ禍を それぞれに生き春を待つ  
コロナ暇 それも良しとし座す机

### 老いてなお

老いてなお俺は俺がとからいぱり  
腹立つも妻の苦言に道理あり  
永久の愛誓えど時が忘れさせ  
右左いまだ間違う一画目  
経写す微かに響く筆の音

### ステイホーム

ステイホームやつぱりきつい座敷牢  
空耳の遠く近くに咳の声  
耳年増黒いかさぶた剥がせない  
脱ぎ捨てた靴のどれにも或る矜持  
時流れ日にち薬の効いてくる

### 原 俊夫

(高9回)

#### ●はら・としお

柳号・閑原。阿智村（旧・会地村）出身。笑いの川柳、囲碁、絵書きのほか、最近は随筆書きです。最近、コロナ感染者扱いされて、6日に及ぶ個室隔離入院の珍なる体験をした。結果、PCR陰性の咽頭蓋炎でしたが、随想「原さんがコロナ？」執筆。「幸運の童雲」や「猫の気持」など書きつつ、馬齢を重ねています。「元気だが年金頂き肩すぼめ」です。

### 木下徹信

(高10回)

#### ●きのした・てつのぶ

柳号・とおる。飯田出身。川柳では、心のありようを大胆に読み込んだ作品が好きである。縁あって、80歳で初めて川柳会に参加した。今はコロナ禍で、月例会には投句して参加。発想の意外性やユニークさがポイントと心得てはいるが、共感を得られる作品はごくわずか。見るもの聴くものへの好奇心を絶やさず、精進したいと思っている。

### 宮下恭一

(高18回)

#### ●みやした・きょういち

柳号・じゅう。飯田市大通り2（羽場3区）出身。新型コロナウイルスによる巣ごもりの中、ぎっくり腰、不整脈、無味無臭の食生活を経験。さらに第二の感染症（不安）といううけ者との闘いの中にある。新しい試みとして川柳のオンライン句会に挑戦。海を越えたロスアンゼルスの川柳同人とも交流を始めている。